

「あこがれのからだ」

升井ノイ

【あらすじ】

自殺未遂をした親友を心配している女子大生が、肉体を捨てた人との出会いを通して、親友に生きてもらおうとする。

【登場人物】

ナナ

セイラ

イシキ※

※イシキは体を持たない人物。セイラ、ナナ、ヘビ、ゴキブリ、ハトなどの体を借りて行動する。イシキが入っている状態の人物は名前の後に（イ）と表記する。

【1】

朝の山中。ナナが木の根元を注視しながら一人で歩いている。
キノコを見つけて立ち止まる。ゆつくりと近づいて、周囲を見回した後、軍手をつけた手でそのキノコを採ろうとする。

イシキ 「あの」

どこからか声が聞こえる。

ナナ、びくりと振り返る。見回しても誰も見当たらない。もう一度キノコに手を伸ばす。

イシキ 「あーあー、待つて待つて」

茂みがガサガサと震えて、中からヘビが一匹出てくる。

ナナ、驚いて尻もちをつく。

ナナ 「わあっ！」

イシキ 「ああっ、すみません、驚かせて」

ナナ 「えっ、えっ！？ なに！？」

イシキ 「すみません、やむをえず」

ナナ 「じゃ、しゃべってる！？」

イシキ 「怪我はありませんか？」

ナナ 「やさしい……いやいやいやいや」

ナナ、立ち上がってヘビと距離をとる。

イシキ 「あの、それ。毒がありますよ」

ナナ 「え、あ、これ？」

ナナ、キノコを指差す。

イシキ 「はい。それを食べたなら、体がダメになってしまいます」

ナナ 「あの、それより、あなたは？」

イシキ 「あ、私ですか。私も毒は持つてますけど」

ナナ 「いや、来ないで！」

イシキ 「いえいえ、噛んだりしません。怖がらないでください」

ナナ 「無理無理無理、怖いもん！」

イシキ 「どうか、聞いていただきたいお願いがあるのです」

ナナ 「お、お願い？」

イシキ 「はい。どうか……その体を、貸していただけませんか」

ナナ 「……は？」

イシキ 「私、本当はヘビではないのです。体をお借りしているだけで」

ナナ 「体を……借りる？」

イシキ 「私は人間です。しかし、人間としての体はずいぶん前に捨ててしまいました。今は親切なヘビさんの体をお借りして、あなたとお話しています」

ナナ 「ちよつと、よくわからないんだけど。体を捨てた、つてどういうこと？」

親切なヘビって？」

イシキ 「話せば長くなるのですが」

ナナ 「待つて待つて。頭の中ぐちゃぐちゃだから、簡潔に話して」

イシキ 「つまり……私には意識がありますが、体がありません。ですが、誰かの体を借りることはできます。そして今、私はヒトの体をお借りしたいんです」

ナナ 「ええと……それはどうして？ 捨てたんじゃないの？」

イシキ 「オリンピッククに出たいんです」

ナナ 「オリンピッククう？ どうして？」

イシキ 「私の意識はインターネットに繋がれています。それによって様々な情報を得て、充実した生活を送っています」

ナナ 「え、ユーチューブとかも見れるってこと？」

イシキ 「はい。仮想通貨で稼いでいるので、お金を払ってネットフリックスも見ています」

ナナ 「すごい！」

イシキ 「しかし、手に入らないものもあります。ある日、なんとなく見始めたオリピックの映画に、私は釘付けになりました」

照明が暗くなり、背景にオリンピックの映画が流れる。

イシキ 「あんなに美しく誇り高いものだったとは知らず、憧れを抱きました。だけ

ど、私には体がありません。あの舞台に立つことは叶いません。手に入らないと思うと、なんとしてでも手に入れたくなるのが人間です。そんな感情を、久しぶりに思い出しました」

照明が明るくなり、元の森に戻る。

イシキ 「自分勝手なお願ひなのは承知しています。ですが、偶然にもあなたに出会

えた幸運にすぎりたいのです。どうか、その体を貸していただけませんか」

ナナ 「そ、そんなこと言われても。第一、無理ですよ、私がオリンピッククに出る

なんて。体育苦手だもん」

イシキ 「自分で鍛えますので、そこをなんとか」

イシキ、頭を下げながらナナに詰め寄る。ナナは後ずさる。

ナナ 「いや、無理っ、私、そんなの……！ あ……でも」

ナナ、何かを思いついたように考え込む。少しの間の後、話す。

ナナ 「私より適任な人を、紹介できるかも」

【2】

セイラの部屋。セイラはクッションソファに寝転がってスマホをいじっている。
鍵とドアが開く音が聞こえて起き上がり、舌打ちをする。

ナナ 「セイラ、いる？」

セイラ 「勝手に入ってこないでっば……うわあ！」

肩にヘビを巻いたナナが現れて、セイラは思わず立ち上がる。

セイラ 「あんた、な、な、なに、それ」

ナナ 「あ、ごめんごめん、驚かせて」

イシキ 「お騒がせしてすみません」

セイラ 「ひいつ、しゃべった！？」

セイラ、驚いて部屋の奥に逃げる。

ナナ 「大丈夫だよ！ この人は……あれ、そういえば名前聞いてなかった」

イシキ 「名前ですか。ええと、それでは、イシキとでも読んでください」

ナナ 「イシキさん。私はナナです。あの子は……」

セイラ、包丁を持って戻ってくる。

セイラ 「ナナから離れて！」

ナナ 「うわっ、セイラ、危ないって！」

セイラ 「あんたの方が危ないわよ！ それ、ママシでしょ！？」

イシキ 「いえ、私は……」

セイラ 「しかもしゃべってる！ 化け物じゃない！」

ナナ 「悪い人じゃないんだって！ 落ち着いて、話聞いてよ」

セイラとナナ、少しの間睨み合う。

セイラ 「……せめて、生身は勘弁して。毒ヘビがいるとかハラハラする」

ナナ 「わかった。じゃあ、セイラもそれしまってよ」

セイラの部屋の中心にヘビ（イシキ）が入った昆虫ケースが置かれている。その周りにナナとセイラが座っている。

セイラ 「意味がわからないんだけど。体捨てたとかオリンピッククに出たいとか」

イシキ 「難しいお願いをしているのは、承知の上です」

セイラ 「これ、よくできたロボットか何かなんじゃないの？」

ナナ 「そんな言い方ないでしょ」

セイラ 「あんたの方がどうかしてる。こんな話信じるなんて」

イシキ 「あの、ナナさんは悪くありません。私の勝手なお願いを聞いて、セイラさんを紹介してくださいなんです」

「それもムカつくの。わけわかんないことに巻き込まないでよ」

ナナ 「だって、セイラは一度捨てようとしたでしょ！」

イシキ 「え？」

ナナ 「この間、セイラは自殺しようとしたんです。そのドアノブで首を吊ろう

として……私が見つけて引き止めたけど……」

「そんな……」

イシキ 「だからって……こんなわけわからないことに協力なんてしない」

セイラ 「別に、セイラの体がどうでもいいなんて思っていないよ。それより、セイラ

ナナ は陸上の才能があるんだから」

「そういうの、ウザいから」

セイラ 「私はただ……」

ナナ 「勝手に私に夢見ないでよ。あんたにとにかく言われる筋合いない」

セイラ 「聞いてよ。セイラがまた、自信を持ってくれたらと思って……」

ナナ 「そういうのがウザいって言うてんの！」

セイラ 「お、落ち着いてください」

イシキ 「もう出て行って」

セイラ 「やだ、わかったよ、謝るから」

ナナ 「何を？」

セイラ 「だって怒ってるじゃん」

ナナ 「何に怒ってるかもわかってないくせに」

イシキ 「やめてください！」

セイラ 「やめてください！」

ナナ 「やめてください！」

セイラ 「やめてください！」

イシキ 「やめてください！」

セイラ 「やめてください！」

ナナ 「やめてください！」

イシキ 「やめてください！」

セイラ 「やめてください！」

ナナ 「やめてください！」

イシキ 「やめてください！」

セイラ 「やめてください！」

ナナ 「やめてください！」

ゴキブリが現れて床を歩く。ナナはそれに気づく。

ナナ 「ああ！ セ、セイラ、下！」

セイラ 「はあ？」

ナナ 「床！ あれ！」

ナナ、セイラの顔をつかんで無理やり下を向かせる。
セイラ、ゴキブリに気づく。

セイラ 「きやあああああああ！！！」

セイラ、周囲にあるものをゴキブリに向かって投げつける。ゴキブリはそれらをかわして逃げていく。

イシキ 「わあ、やめてください！」

ナナ 「え？ イシキさん？」

イシキ 「私、私です！ 今、こちらの体をお借りして」

セイラ 「なんでよりにもよってそれなのよ！」

イシキ 「お二人を止めなきやと思って。それで、近くにいて体を貸してくださいだったのが親切なゴキブリさんで」

セイラ 「え、もしかして、私の部屋にずっといたの、そいつ？ 無理、無理無理無理無理」

ナナ 「怖がりすぎだつて」

ナナ、ゴキブリに近づいて素手でつかむ。

セイラ 「ひーーーーー！！！」

ナナ 「他にもこの家の中にいるんですか？」

イシキ 「いえ、一匹だけで迷い込んだそうです」

ナナ 「だって。よかったじゃん。この一匹を逃がせば大丈夫だよ」

セイラ 「だったら、早くそいつ逃がしてよ！」

ナナ 「じゃあ、今日も泊まっていい？」

セイラ 「う……ずるい、そんなの……」

ナナ 「じゃあ、イシキさんにはこの姿でここに住み着いてもらおうかなー」

セイラ 「やめてよ、わかった！ わかったからどこかにやって！」

ナナ、窓からゴキブリを逃がす。

イシキ、ヘビの中に戻る。

イシキ 「ふう、戻りました」

ナナ 「これでわかったでしょ。イシキさんは本当に体がないんだよ」

セイラ 「……………腹話術とかじゃないよね…………？」

ナナ 「そんな器用なこと、私ができるわけじゃないじゃん。わかるでしょ」
セイラ 「はあ……………」

ナナ 「目の前で喧嘩しちゃってごめんなさい」

イシキ 「いえ、むしろ、私のせいで申し訳ありません」

ナナ 「イシキさんのせいじゃないんです。いつもこんな感じで。ほら、セイラも謝って」

セイラ 「……ごめんなさい」

【4】

夜。セイラの部屋。ナナとイシキが話している。少し離れたところにセイラがいる。

ナナ 「ええ、へびって生きたカエルとかトカゲを食べたら、一週間も何も食べなくていいんですか!？」

セイラ 「気持ち悪い話しないでよ」

ナナ 「イシキさんは面白いなあ。いろんなこと知ってるし、優しいし、いい人!」

イシキ 「いえ、ナナさんほどじゃありませんよ」

ナナ 「ええ、そうかなあ？」

ナナの手とへびの頭をぶつけて、ハイタッチのような動作をする。

ナナ&イシキ 「イエーイ!」

セイラ 「すごい仲良くなってる……」

ナナ 「セイラもこっち来なよ」

セイラ 「私はいい。ていうか、そろそろ寝たら?」

ナナ 「セイラこそ」

セイラ 「私は眠くないけど」

ナナ 「じゃあ、私も起きてる」

セイラ 「そう言っつていつも先に寝るくせに」

ナナ 「だってセイラ、寝ようとしなないじゃん」

セイラ 「眠くないんだもん」

ナナ 「だから授業中寝ちゃうんでしょ」

セイラ 「わかったよ。電気消すから」

セイラ、電気を消す。サイドランプだけが部屋を照らしている。

ナナ 「おやすみ。……………おやすみつてば」

セイラ 「はいはい。おやすみ」

二人とも布団に入る。
ナナの寝息が聞こえ始める。
セイラ、起き上がってナナの方をしばらく見ている。

イシキ 「寝ないんですか？」

セイラ 「うわっ、あんた、起きてたの」

イシキ 「この体、夜行性なんです」

セイラ 「出ればいいのに、その体」

イシキ 「毒ヘビと一緒に寝られますか？」

セイラ 「ああ……あんたが出て行ったらただのヘビなのか」

イシキ 「はい。もつとも、本人は嘔んだりする気はないと仰ってますけど」

セイラ 「本人？」

イシキ 「この体の元の持ち主です」

セイラ 「ヘビってこと？ ヘビと話せるの？」

イシキ 「心の中で、ではありませんが」

セイラ 「へえ。あんたに体を貸すって、どんな感じなの」

セイラ 「ええと、そうですね。映画を見ているような、そんな感じだと思います」

セイラ 「映画？」

イシキ 「はい。心の中のなにもない部屋に閉じこもるような感じにはなりますが、

感覚を共有することはできません。視覚と聴覚をオンにすれば、ちょうど、映画を見るような形になります」

セイラ 「ふーん……。じゃあ、私がオリンピックに出る映画が見れるかもしれないんだ」

イシキ 「実際に出るんです。あなたの体が」

セイラ 「面白そう。使う？ 私の体」

セイラ 「え、よろしいのですか？」

「別にいいよ。あんた、そんなに悪い奴じゃなさそうだし。さつきはナナにムカついてただけ。ちよつと言い過ぎたけど」

イシキ 「ナナさんはきつと、そんなに怒ってないですよ。心配しているんだと思います」

セイラ 「……わかってる。私の家に泊まっていくのも、そのせいだろうし」

イシキ 「ひとつ、伺ってもよろしいですか？」

セイラ 「うん」

イシキ 「どうして、死のうとしたんですか？」

セイラ 「……あんたは、元の体が嫌いだった？」

イシキ 「……………」

セイラ 「私は、私の体が嫌い」

「そんな……セイラさんの体はとても美しいです。それにさつき、陸上の才能があるって」

セイラ 「そんなの、別にどうだっていい。私はあんたが少しうらやましい」

大学の運動場。高跳び用のバーとマットが設置されている。
セイラ（イシキが入っている）は一角でアップをしている。ナナが飲み物を持ってそこにやってくる。

ナナ 「お疲れ！」

セイラ（イ） 「お疲れ様です」

ナナ 「これ飲む？」

セイラ（イ） 「いただきます。ありがとうございます」

ナナ 「日本選手権、近づいてきましたね」

セイラ（イ） 「はい」

ナナ 「がんばってくださいね。あ、こういうのプレッシャーかな」

セイラ（イ） 「大丈夫です。セイラさんの体は素晴らしいですから」

ナナ 「イシキさんの努力もすごいですよ。地域選手権で結果残したんですから」

セイラ（イ） 「でも、オリンピックに出るにはもっと頑張らないと」

ナナ 「応援してます。練習見てもいいですか？」

セイラ（イ） 「もちろん」

セイラ（イ） はアップを済ませて、助走をつける。ナナはビデオカメラを取り出して撮る。
セイラ（イ） 、背面跳びをする。バーに接触してしまう。

ナナ 「ああ、惜しい」

セイラ（イ） 「すみません、すみません」

ナナ 「どうしたの？」

セイラ（イ） 、片耳を抑えてぶつぶつとしゃべる。

セイラ（イ） 「すみません、やっぱりまだ少し怯えてしまつて……はい。」

ナナ 「ああ、セイラと話してるのか」

セイラ（イ） 「はい、わかつてます。すみません」

ナナ 「すごい謝つてる」

セイラ（イ） 「謝っても怒られちゃうんですけどね。……あ、はい、すみません」

ナナ 「鬼コーチだ」

セイラ（イ） 「はい、次は必ず」

セイラ（イ） 、助走位置に戻る。ナナも下がってまたカメラを構える。

セイラ（イ） 、背面跳びをする。今度は成功する。

ナナ 「おー！」

セイラ（イ）「やった！」

ナナ、セイラ（イ）に駆け寄ってハイタッチをする。

セイラ（イ）「じゃあ、高さを上げます」

ナナ「新記録出るかなあ」

【6】

セイラの部屋。ヘビ（イシキが入っている）が昆虫ケースの中にいて、そのそばにセイラがいる。

セイラ「だから、踏み込みのフォームが甘いから、体重が乗せきれてないの」

イシキ「はい……」

セイラ「体幹のトレーニングメニュー増やそうか」

イシキ「えっ、また増やすんですか」

セイラ「いや、そもそもあんたが無理言ってるんだからね。オリンピックとか」

イシキ「でも、これ以上はオーバークワークでは……」

ナナ、夕飯を持ってくる。

ナナ「できたよー！ ほら、食べて食べて。イシキさん、というかヘビさんはどうします？」

イシキ「この間マウスをいただいたので……」

セイラ「やめて、食欲なくなるから」

ナナ「じゃ、いただきますーす」

セイラ「いただきます。……うん、おいしい」

ナナ「よかった」

セイラ「最近いつも作ってくれるけど、いいの？」

ナナ「だって、私これくらいしかできないし」

イシキ「素晴らしいことですよ。私も食べてみたいです」

ナナ「あ、そうだ！ 私の体使ってみますか？」

イシキ「ええ、いいんですか!？」

ナナ「私も食べてみてほしいですし」

イシキ「それでは、やってみましょう。目を閉じて、深呼吸をしてください。力を

抜いて、心を無にして……」

ナナ「無って？」

イシキ「宇宙のこととか考えるといい感じですよ」

セイラ「その辺、けっこう雑よね」

ナナ「わかりました。うーん………」

目を閉じたナナが、かっと目を開く。イシキが中に入っている。

ナナ（イ） 「いただきます！ ……おいしい！」

ナナ（イ）、立ち上がって万歳する。食卓のまわりをスキップして回る。

セイラ 「そんなに？」

ナナ（イ） 「だって、食事自体珍しいのに、こんなおいしいものを食べられるなんて！ 二人とも、いつもこんなおいしいものを食べてたんですね」

ナナ（イ）、テンションが上がったあまり、セイラの肩を掴んで話す。

セイラ、ナナ（イ）の額をつかんで押しやる。

セイラ 「近い」

ナナ（イ） 「あ……すみません」

セイラ、ナナに背を向けるようにしてごはんを食べる。

ナナ（イ）、セイラの背中を見続けている。

【7】

暗転。マットに着地する音がする。

舞台中央にマットがある。照明がマットの上のセイラを照らす。

セイラ（イ） 「セイラさん、跳べました。」メートルのセンチ

セイラ 「うん。私のインターハイのときの記録、越えたね」

セイラ（イ） 「セイラさんの指導のおかげです」

セイラ 「ねえ、ひとつお願いがあるの。一度だけ、体を返してもらってもいい？

もう一度、私も跳んでみたい」

セイラ（イ） 「はい」

セイラ、ゆっくりと起き上がる。

セイラ 「背面跳びでバーを乗り越えたとき、視界に一面の空が広がる。その一瞬だけ、思考や重力やあらゆるしがらみから解放されたような気分になって……

それがとても好きだった。そんなことを、思い出したんだ」

セイラ、立ち上がって袖に消えていく。

病院の待合室。大きな窓があり、セイラがそれを眺めながら座っている。そばに松葉杖が立てかけられている。

ナナが焦った様子でやって来る。

ナナ 「セイラ！」

ナナ、セイラの足元にしゃがんで、呼吸を整える。

ナナ 「怪我したって……」

セイラ 「結構、いろいろやつちやつたみたい。選手権は出られない。それに……復帰できるかどうかわからないってさ」

ナナ 「私……止めればよかった。最近の練習、ちよつとやりすぎてるのはわかってたのに、無責任に応援して……ごめん……ごめんね……」

セイラ、立ち上がる。

窓の淵にハトが飛んできて止まる。

セイラ 「バカだなあ、ナナのせいじゃないよ。責任感じゃないで」

ナナも立ち上がる。

ナナ 「イシキさんは？」

セイラ 「追い出しちゃった。私の体から。またへビの中にでもいるんじゃない？もし会ったら、謝っておいて。責任感してるはずだからさ、イシキのせいじゃないって言っておいて」

ナナ 「セイラは？ 帰らないの？」

セイラ 「まだリハビリの相談があるの」

ナナ 「そっか……。じゃあ、セイラの部屋で待ってるね」

ナナ、背を向けて行こうとする。

セイラ 「ナナ」

ナナ 「ん？」

セイラ 「その……ごめんね。応援してくれてたのに」

ナナ 「そんなのいいよ」

セイラ 「イシキだけじゃなくて、私もオリンピックに出たいと思うようになってた。だから二人分頑張っちゃって、イシキの分まで、夢潰しちゃった」

セイラ、涙声でうなだれる。ナナはセイラの肩を支えて、頭を撫でる。

ナナ 「しょうがないよ。頑張ったんだね、セイラ」

セイラ 「好き」

ナナ 「え？」

セイラ 「ずっと……ずっと好きだった。ナナのこと」

ナナ、セイラから手を離す。

ナナ 「え……つと、それ、どういう意味？」

セイラ 「……冗談だよ。じゃあ、行ってくる。バイバイ」

セイラ、松葉杖をついて歩いていく。窓の外のハトが飛んでいく。

【9】

セイラの部屋。ヘビが入った昆虫ケースをナナが覗いている。ヘビは大人しくしている。

ナナ 「イシキさん！ イシキさん！ ……イシキさん、いない？ ……どこ行っちゃったんだろう？ イシキさん？」

ナナ、昆虫ケースを叩いてみたり、部屋の中を見回したりした後、仕方なくソファに座る。少しの沈黙の後、ヘビがケースを叩く。

イシキ 「ナナさん！ ナナさん！」

ナナ 「イシキさん！ どこ行ってたの？」

イシキ 「大変です！ セイラさんを止めてください！」

ナナ 「え？」

イシキ 「廃ビルの屋上から飛び降りようとしています！」

ナナ 「え！？ どうして！？」

イシキ 「わかりません、私はセイラさんの体を出て、でも心配で、ハトさんの体を借りて見守っていたのですが……」

ナナ 「ダメ、電話通じない。今からタクシー拾っても……絶対間に合わないよ！ どうしよう！？」

イシキ 「近くに体を借りられそうな生き物もいません」

ナナ 「セイラの体に入ることは！？」

イシキ 「追い出されたんです。合意がなければ借りることは……」

ナナ 「慣れた体なんだから、むりやり入ることはできない！？ このままじゃセイラが死んじゃう！」

イシキ 「……わかりました。やってみます」

ナナ、ヘビの入ったケースにすがりつく。少しの沈黙。

ナナ 「イシキさん？ ……うまくいったの？」

ナナの携帯が鳴る。ナナ、焦りながら着信を取る。

ナナ 「もしもし!？」

無言が続く。

ナナ 「イシキさん!？ セイラ!？ 無事なの!？」

セイラ（イ） 「ナナさん」

ナナ 「……イシキさん？」

セイラ（イ） 「イシキです。セイラさんの体に入れました。……でも、セイラさんがいなくなつてしまいました」

ナナ 「……え？」

【10】

廃ビルの屋上。ナナとセイラ（イ）が立っている。

セイラ（イ） 「合意を得ずに体に入るのは初めてだったんです。こんなことになるなんて……」

ナナ 「私が頼んだんです。私のせいで……セイラの意識は消えちゃったんですか……？」

セイラ（イ） 「消えてはいません。この体の中にいないだけで、近くにいますはずですよ」

ナナ 「じゃあ、どうやって戻ってこれるんでしょうか」

セイラ（イ） 「わかりません。困ったことに、私がこの体に定着してきているのです」

ナナ 「イシキさんが？」

セイラ（イ） 「私もセイラさんの体から出られなくなつてしまいました。決して、こんなことを望んでいたわけではないのです。セイラさんの体は素晴らしいですが、自分のものにしようなんて考えたことはありません。信じてもらえますか？」

ナナ 「わかってますよ。イシキさんはそんな人じゃないです」

セイラ（イ） 「ナナさんは本当に優しいですね。怪我をしてしまったのも、ナナさんのせいではありません。自分を責めるのは悪い癖です」

ナナ 「でも……」

セイラ（イ）、松葉杖をついてナナの前を横切る。

セイラ（イ）「考えがあります。セイラさん呼び戻す方法です。でも、私ひとりではできません」

ナナ「もちろん、私も手伝います!」

セイラ（イ）「どんなことでも手伝いますか?」

ナナ「え?」

セイラ（イ）「きつとナナさんは嫌がる方法です。それでもよければ、ついてきてください」

セイラ（イ）、松葉杖をついて行く。ナナはそれを見ていたが、小走りについていく。

【11】

夕方の山中（冒頭のシーンと同じ場所）。キノコがなくなっている。
セイラ（イ）とナナがやってくる。ナナは肩を貸している。

ナナ「足元に気をつけて」

セイラ（イ）「ナナさんは足元が悪い場所に慣れていますね」

ナナ「昔から好きなんです。山とか森とか、虫とか植物とか」

セイラ（イ）「そういえば、初めて会ったのはこの辺りでしたね。ちよつと手伝っていただけですか?」

茂みをかき分けると、小さな小屋がある。

セイラ（イ）「ありました」

ナナ「こんなところに何があるんですか? 鍵もかかっているし」

セイラ（イ）、錠前をいじくって外す。

セイラ（イ）「外れました」

ナナ「えっ、なんで!？」

セイラ（イ）「南京錠に見せかけて、私が作った知恵の輪ですから」

ナナ「イシキさんが作ったの?」

セイラ（イ）「まだ体があった頃の話です。まさか残っているとは思いませんでした」

セイラ（イ）、小屋の扉を開ける。

セイラ（イ）「どうぞ」

ナナ「え、な、何があるんですか?」

ナナとセイラ（イ）、小屋に入る。

ナナ 「そんなこと言わないでください。二人とも無事でいられる方法はないんですか」

セイラ（イ） 「そもそも、この体はセイラさんのものです。そして私はもう生きていないはずなんです。元々の状態に戻るだけです」

ナナ 「でも……」

セイラ（イ） 「ひどいことを頼んでいるのはわかっています。でも、こんなことを頼めるのはナナさんしかいません。どうか、私の死を見つけてください」

またガタガタと震えて、エレベーターの音が止まる。

セイラ（イ） 「着いたようです。一緒に来てもらえますか？」

ナナ 「イシキさんは、本当に後悔しないの？」

セイラ（イ） 「そもそも私は、オリンピックへの出場を叶えたら消えるつもりでした」

ナナ 「それは叶わなかったじゃないですか」

セイラ（イ） 「私が欲しかったのは、きつとメダルではありません。ハッピーエンドです。夢を叶えて、最高潮の瞬間に消えたいという、自分勝手な願いです」

セイラ（イ） 、松葉杖をついてエレベーターを出ていく。

ナナ 「幸せなときに死にたいと願うのは、悪いことじゃないと思います」

セイラ（イ） 「今の私は幸せですよ」

ナナ 「なんですか」

セイラ（イ） 「ナナさんとセイラさんに出会えてよかった。だから、二人に看取ってほしいんです。最後までわがままな生き方ですね」

ナナ、エレベーターを出る。

ナナ 「そんな言い方しないでください。イシキさんは、セイラを助けるために消えるんです。それだったら、ついていきます」

セイラ（イ） 「本当に優しい人ですね」

セイラ（イ） 、進んでいく。ナナもそれについていく。

【12】

地下室。重い扉が開く音がする。

部屋の中は埃っぽくて薄暗い。壁が何箇所か壊れていて、そこから木が根を張っている。

壁際には様々な機械がある。その機械から伸びた無数のコードが、中央にある棺のような箱に繋がっている。

セイラ（イ） とナナが咳をしながら入ってくる。

セイラ（イ）「ひどいですね。よくまあ、これまで持ちこたえたものです」

ナナ、床に置かれた箱に近づいて膝をつく。セイラ（イシキ）もそれに続く。

セイラ（イ）「ひとつだけ、言っておきたいことがあります」

ナナ「はい」

セイラ（イ）「セイラさんが言っていたことは、冗談ではありません」

ナナ「……うん、わかってます」

セイラ（イ）「体を借りるようになってから、セイラさんの気持ちに気づきました。そしてそれが、彼女が自分の体を嫌う理由だとも」

ナナ「考えたこともなかったです。正直、セイラが戻ってきてても、どういう顔で会えばいいのかわからない。こんなじゃ、イシキさんは安心して消えられないですね」

セイラ（イ）「セイラさんが目覚めたときに、私の物語は終わります。その後あなたがどういう選択をしても、私には関係のないことですよ」

ナナ「イシキさんはどうなったらいいと思う？」

セイラ（イ）「私にもわかりません。ただ、二人とも幸せになっただけなのと、思っています。だから、あのキノコは捨ててください」

ナナ「え？」

セイラ（イ）「初めて会った時、こっそり持って帰っていたでしょう」

ナナ「気づいてたんですか」

セイラ（イ）「へびさんの嗅覚はとても優れていますから」

ナナ、バッグからキノコを取り出す。

ナナ「セイラに、一人になってほしくなくて」

セイラ（イ）「もし自殺を止められなかったら、後を追うつもりで？」

ナナ「晩ご飯に混ぜるだけなら、怖くないかなって……」

セイラ（イ）、ナナの手からキノコを奪って立ち上がり、壁の穴にぶん投げる。

セイラ（イ）「そりゃー！」

ナナ「あ！」

少しの沈黙の後、ナナが笑い出す。セイラ（イ）もつられて笑う。

ナナ「あはははは！ ありがとう、イシキさん」

セイラ（イ）「セイラさんも同じことをしたはずですよ」

ナナ「え？」

セイラ（イ）「ナナさんが後を追うと知っていたら、セイラさんは死にませんよ」

セイラ（イ）、ナナの手をとって箱の蓋に手をかけさせる。

ナナ 「いなくならないでほしい、です」

セイラ（イ） 「その言葉だけで充分です。ナナさんに出会ってからの時間は、私の一生の中で一番寂しくないものでした。もし来世があるなら、どんな体を与えられるのか、今は少し楽しみです」

ナナ 「オリンピック、きつと出られますよ」

セイラ（イ） 「見てももらえるくらい、活躍できるといいな。それでは、どうかお元気で」

ナナ、箱の蓋をゆっくりと開ける。

イシキが入っていたセイラの体が、箱を抱くようにゆっくりと倒れる。

ナナ、箱の中身を覗き込む。中に手を入れてイシキの体（骨）を撫でる。

ナナ 「はじめまして。それから、おやすみなさい」

暗転。

【13】

ナナ、セイラを心配そうに見ている。

セイラ、目を覚ます。

セイラ 「ナナ……？」

ナナ 「あ、やっと起きた！ もう！ 起きなかったらどうしようかと思った！」

セイラ 「私……どうなったの？」

ナナ、セイラを抱きしめる。

ナナ 「また会えなかったらどうしようと思った……」

セイラ 「ど、どうしたの？」

ナナ、泣きながらセイラに嘆願する。

ナナ 「私、明日もセイラに会いたいよ。明後日も、明々後日も、来年も再来年も

その先も、会えたら嬉しいよ。だからさ、死なないでよ……」

セイラ 「……しょうがないな」

終わり